

第二回全史料協訪中団報告

全史料協主催第二回訪中団は、平成2年10月25日～11月1日に中国の档案施設を見学し交流を深めてきた。以下は、その報告。

そもそも全史料協と中国档案機関との交流は、

昭和63年の第一回訪中に始まった。中国では我国の文書館相当施設を档案館と呼び、その数は全国で約3000。また、各档案館への中央統制機能を有する中国国家档案局や専門職員団体の中

国档案学会がある。第一回の訪中では、北京にある中国国家档案局、中国第一歴史档案館及び承德にある文津閣を訪ねた。この交流を機に全史料協は、中国国家档案局、中国档案学会と友好団体となり、以後出版物の交換を行っている。このような経緯のもとに、今回の第二回訪中団の結成を迎えた。

今回の訪問都市及び施設は、北京の中国第一歴史档案館、北京図書館、中国人民大学档案学院、南京の中国第二歴史档案館、上海の上海市档案館。参加人数は19名。団長は藤沢市文書館の高野修氏、副団長は茨城県立歴史館の高橋実氏、事務局は東京都公文書館の水口と水野が担当した。なお、各訪問施設では資料交換を行った。また、中国国家档案局局长の馮子直氏より、1996年ICA国際大会の開催が中国に決まった事を知らされた。

10/25(木)

午前成田発、午後北京着。

中国档案学会国際連絡部長張義順氏他の出迎えを受け、訪問施設の打ち合わせ。午後、天安門登壇。夜、団四役が中国国家档案局、中国档案学会、中国第一歴史档案館の代表者と懇談会。

10/26(金)

午前、中国第一歴史档案館と皇史宬。

中国第一歴史档案館は1925年設立、明・清時代の歴史档案を保存。施設概要の説明を受け、展示室、書庫、閲覧室等を見学。整理分類、修復等の作業室で現場の職員に質疑応答。皇史宬は明代の嘉靖13年(1534)に造られた文庫。古代の石室金櫃を思わせる、厚さ3mもの石造側壁に驚く。



中国第二歴史档案館(南京)

午後は、北京図書館で四庫全書の原本を拝見し、施設の見学。次いで、中国人民大学档案学院へ。中国では各ランクの専門職員養成教育が実施されているが、全国の30程の大学では高等教育が行われている。本校は中でも最も古く1952年設置。教育内容に関して質疑応答の後、主に科学技術関係の施設を見学。

夜、雑技を見物。

10/27(土)

万里の長城、明の十三陵等北京郊外の観光。

夜、お世話になった中国国家档案局、中国第一歴史档案館、中国档案学会の代表をお招きし交流夕食会。

10/28(日)

午前、故宮博物院見学。夕、空路南京へ。

10/29(月)

午前、靈谷寺、中山陵等南京郊外の観光。

午後、南京博物院、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館見学

10/30(火)

午前、中国第二歴史档案館。

同館は1951年設立。国民党政権時代の档案をはじめ、多くの档案を保存。抗日戦争に関する档案も多数。概要説明後、施設見学。特に修復部門で、従来の裏打ちとは異なる技法に質問が集中。午後は長江大橋、玄武湖、太平天国記念館等を見物。

10/31(水)

早朝の列車で上海へ。昼頃着。食後上海市档案館へ。同館は1959年設立、国民党時代及び解放後の上海関係档案を多数保存。ビデオによる施設概要を見る。後、書庫、修復業務を見学。

11/1(木)

午前、魯迅公

園，玉仏寺見物。

午後，空路大阪經由羽田へ。

★第一回の訪中に較べ，地方档案馆や専門職員養成機関を見学できた事，各館の書庫を見学する事により档案の整理区分方法が理解できた事は大きな収穫であった。また，膨大な档案関係出版物は我々の刺激にもなった。一方，通訳を

介しての質疑応答には限界があり，訪問相手のシステムに関する事前研究は是非とも必要である。幸いに今回は多くの出版物を購入してきており，翻訳できれば我国の文書館学発展の上にも利すること大である。継続した交流が望まれる。
(東京都公文書館・水野保)